

究極の放擲者

—— *Paramahaṃsa-upaniṣat* 和訳 ——

堀 田 和 義

はじめに⁽¹⁾

今日の研究では、ウパニシャットと呼ばれる一群の文献を、概して古く、ヴェーダ学派内で著された *major Upaniṣad* (あるいは、*classical Upaniṣad*) と、後代のもので、宗派的な性質のものも含む *minor Upaniṣad* に分けることがあり、後者には、放擲 (*saṃnyāsa*) を主要なテーマとする、その名も *Samnyāsa-upaniṣat* と呼ばれるグループがある。本稿で訳出する *Paramahaṃsa-upaniṣat* もそこに含まれ、*Muktikā-upaniṣat* が提示する 108 のウパニシャットのリストでは 19 番目に位置している。⁽²⁾

Samnyāsa-upaniṣat という名称は、ドイツのインド学者 Paul Deussen が付けたものである。Deussen は 60 種類のウパニシャットのドイツ語訳 (Deussen 1905) の中で、アタルヴァ・ヴェーダに属するウパニシャットを、内容に応じて、(1) 純粹にヴェーダーダ的なウパニシャット (*Reine Vedānta-Upaniṣad's*)、(2) ヨーガに関するウパニシャット (*Yoga-Upaniṣad's*)、(3) 放擲に関するウパニシャット (*Sannyāsa-Upaniṣad's*)、(4) シヴァに関するウパニシャット (*Śiva-Upaniṣad's*)、(5) ヴィシュヌに関するウパニシャット (*Vishṇu-Upaniṣad's*) の 5 種類に分類している。

Deussen の研究において *Samnyāsa-upaniṣat* に含まれていたのは、*Brahma-upaniṣat*、*Samnyāsa-upaniṣat*、*Āruṇeya-upaniṣat*、*Kaṭhaśruti-upaniṣat*、*Paramahaṃsa-upaniṣat*、*Jābāla-upaniṣat*、*Āśrama-upaniṣat* という 7 種類であったが、Schrader の批判校訂本において、20 種類に拡大された。

Paramahaṃsa-upaniṣat を含む *Samnyāsa-upaniṣat* に関しても、インドの他の多くの文献と同様、正確な年代を知ることはできない。しかしながら、Schrader は自らの見解に従って、20 種類のテキストを相対的に古いものから順に並べており、さらには全体を大きく2つのグループに分けて、*Āruṇi-upaniṣat* から *Brahma-upaniṣat* までを「より古いもの (older one)」、*Maitreya-upaniṣat* 以降のものを「より新しいもの (younger one)」と呼んでいる⁽³⁾。

Paramahaṃsa-upaniṣat のタイトルに含まれる“paramahaṃsa”という語は、最高のハンサ鳥を意味する。Deussen 1905 によれば、ハンサ鳥の放浪については、『リグ・ヴェーダ (*Rgveda*)』や『チャンドーギヤ・ウパニシャット (*Chāndogya-upaniṣat*)』、『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャット (*Śvetāśvatara-upaniṣat*)』などでもすでに言及されている。それは、一方では、輪廻するアートマンを、他方では、遍歴遊行者を象徴するものとされたが、このテキストのタイトルにおいては、後者の意味で用いられている。

Samnyāsa-upaniṣat には、生活様式にもとづいて、修行者を4種類⁽⁵⁾、もしくは、6種類⁽⁶⁾に分類するものが見られる。パラマハンサはその中の一種であり⁽⁷⁾、ここに訳出した *Paramahaṃsa-upaniṣat* では、そのパラマハンサと呼ばれる修行者のあり方が説かれる。

Paramahaṃsa-upaniṣat は極めて短いテキストであり、全体は4つの節から構成される。ナーラダが尊者(ブラフマン、またはヴィシシュヌとされる)に近付いて、パラマハンサと呼ばれるヨーガ行者の道 (*mārga*) と行状 (*sthiti*) について尋ねるところから始まり、それに対する答えがこのテキストの主な内容となっている。

第1節ではパラマハンサの特徴が説かれる。しかし、その後で、それが究極的なものではないことが明かされ、第2節で、すべてを放擲して遍歴し、ブラフマンとアートマンの同一性を認識する、パラマハンサの究極的な生き方が説かれる。第3節では、認識という一本の杖を持つ者 (*ekadaṇḍin*) と木製の杖 (*kāṣṭhadaṇḍa*) を持つ者の違いが簡潔に説かれ、第4節ではパラマハンサの特徴に関するさらに詳細な説明がなされる。

翻訳に際しては、Schrader による批判校訂本を底本として使用し、以下の 3 種類の注釈を参照した。

【底本】

- ・ *The Minor Upaniṣads Vol.1: Saṃnyāsa-Upaniṣads*. Ed. F. Otto Schrader. Madras: The Adyar Library, 1912.

【注釈】 ※出版年代順

- ・ *Upaniṣadāṃ Samuccayaḥ*. Ed. Hari Nārāyaṇa Āpaṭe. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvali no. 29. Puṇyapattana(Pune): Ānandāśramamudraṅālaya, 1895. (ナーラーヤナ注、および、シャンカラ＝ナンダ注。前者には、マーダヴァ注の影響が色濃く見られる⁽⁸⁾)
- ・ *Jīvanmuktiviveka*. Ed. Hari Nārāyaṇa Āpaṭe. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvali no. 20. Puṇyapattana(Pune): Ānandāśramamudraṅālaya, 1916. (マーダヴァ注。独立の注釈書ではなく、*Jīvanmuktiviveka* という著作の中で、生前解脱の説明を終えた後に、それに資する「賢者の放擲 (vidvatsaṃnyāsa)」として説かれる)
- ・ *The Saṃnyasa Upaniṣads with the Commentary of Sri Upaniṣad-Brahma-Yogin*. Ed. T. R. Chintamani Dikshit. Madras: The Adyar Library, 1929. (ウパニシャット・ブラフマ・ヨーギン注)

また、入手することのできた以下の 6 種類の翻訳 (和訳 1 種、英訳 3 種、ドイツ語訳 1 種、フランス語訳 1 種) を参照した。

【翻訳】 ※出版年代順

- ・ *Sechzig Upaniṣad's des Veda aus dem Sanskrit Übersetzt und mit Einleitungen und Anmerkungen Versehen*. Tr. Paul Deussen. Leipzig: Brockhaus, 1905. (= Deussen 1905)
なお、このドイツ語訳には、英訳 (*Sixty Upaniṣads of the Veda*. Tr. V. M. Bedekar & G. B. Palsule. Delhi: Motilal Banarsidass, 1980) がある。
- ・「パラマハンサ・ウパニシャット」、福島直四郎訳、『ウパニシャット全書

- (第7巻)』(高楠順次郎監修)所収, 世界文庫刊行会, 1923. (=福島1923)
- ・ *Minor Upanishads*. Tr. Swami Gambhirananda. Calcutta: Advaita Ashrama, 1956. (=Gambhirananda 1956)
 - ・ *The Saṃnyāsa Upaniṣad-s (on Renunciation)*. Tr. A. A. Ramanathan. The Adyar Library Series Vol. 104. Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1978. (=Ramanathan 1978)
 - ・ *Upaniṣad du Renoncement (saṃnyāsa-upaniṣad)*. Tr. Alyette Degraçes-Fahd. L'espace Intérieur 36. Paris: Fayard, 1989. (=Degraçes-Fahd 1989)
 - ・ *Saṃnyāsa Upaniṣads: Hindu Scriptures on Asceticism and Renunciation*. Tr. Patrick Olivelle. New York & Oxford: Oxford University Press, 1992. (=Olivelle 1992)

網羅的な研究としては, Schrader の弟子の Sprockhoff による次の研究がある.

【研究】

- ・ *Saṃnyāsa. Quellenstudien zur Askese im Hinduismus I. Untersuchungen über die Saṃnyāsa-Upaniṣads*. Joachim Friedrich Sprockhoff. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 1. Wiesbaden: Kommissionsverlag Franz Steiner GMBH, 1976. (=Sprockhoff 1976)

凡 例

- ・ 内容を解釈するうえでの多少細かい点についても注記したため, 底本のテキストをローマナイズしたのも提示し, その後に和訳を提示するという順序をとった.
- ・ 節の分け方は底本に従った. ただし, 節の内部でも, ある程度の内容のまとまりに応じていくつかに分け, 和訳においては, 読みやすさを考慮して, さらに細かく段落を分けた.
- ・ 指示代名詞は, 直後に(=)を用いて, 指示対象となる名詞を補った.
- ・ 訳者が補った原文にない語には, []を用いた.

- ・文末の注には、内容の理解に最低限必要と思われる情報や、注釈における解釈、先行する翻訳において解釈が大きく異なる点などを中心に注記した。先行研究はそれぞれ底本を異にするため、基本的には、同じ読みで解釈が異なる場合に限定して注記した。
- ・ *Samnyāsa-upaniṣat* のテキストの引用は、いずれも Schrader の批判校訂本によるものである。注釈の引用は必要な箇所限り、訳者の判断で適宜、文を切った。

和 訳

atha paramahaṃsopaniṣat

『パラマハンサ・ウパニシャット』

第 1 節

⁽⁹⁾

om/

オーム。

【テキスト】

atha yoginām paramahaṃsānām ko 'yaṃ mārgas teṣām kā sthitir iti nārado
bhagavantam upagamyovāca/

【和訳】

ナーラダは、⁽¹⁰⁾尊者に近付いて、⁽¹¹⁾尋ねました。

「パラマハンサというヨーガ行者たちの⁽¹²⁾道はどのようなものですか。彼ら
(=パラマハンサというヨーガ行者たち)の⁽¹³⁾行状はどのようなものですか。」

【テキスト】

taṃ bhagavān āha/ yo 'yaṃ paramahaṃsamārgo loka durlabhataro na tu bāhulyam/

yady eko bhavati sa eva nityapūtasthaḥ sa eva vedapurūṣa iti viduṣo manyante mahāpurūṣo yaccittam tat sadā mayy evāvatiṣṭhate tasmād ahaṃ ca tasminn evāvasthitaḥ/ asau svaputramitrakalatrabandhvādīn śikhāyājñopavītam svādhyāyam ca sarvakarmāṇi samnyasyāyam brahmāṇḍam ca hitvā kaupīnam daṇḍam ācchādanam ca svaśarīrasyopabhogārthāya ca lokasyopacārāya ca parigrahet/

【和訳】

尊者は、彼（＝ナーラダ）に答えました。

「世において、このパラマハンサの道は、極めて見出し難く、ありふれたものではありません。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

もし、〔その道を歩む優れた人が⁽¹⁶⁾〕1人いるとしたら、「その者こそが永遠に清浄なもの⁽¹⁷⁾に住しており、その者こそがヴェーダの人である⁽¹⁸⁾」と、賢者たちは考えます。

⁽¹⁹⁾彼は偉大な人物であり、⁽²⁰⁾その者の心は常に私だけに留まっているがゆえに、私も彼だけに留まっています。⁽²¹⁾⁽²²⁾⁽²³⁾

⁽²⁴⁾彼は、自分の息子、友人、妻、親族など、⁽²⁵⁾鬘、祭儀紐、ヴェーダの独詠、すべての行為を放擲し、⁽²⁶⁾世界を放棄して、⁽²⁷⁾自身の身体を保護するために、⁽²⁸⁾また世の人々の役に立つために、⁽²⁹⁾腰布、⁽³⁰⁾杖、⁽³¹⁾衣を手に取るべきです。⁽³²⁾⁽³³⁾

【テキスト】

tac ca na mukhyo 'sti/ ko mukhya iti ced ayam mukhyaḥ//1//

【和訳】

しかし、それ（＝腰布などを手に取ること⁽³⁴⁾）は究極的なものではありません。「究極的なものとは、どのようなものですか⁽³⁵⁾」と尋ねるならば、〔答えましょう。〕次のようなものが究極的なものです。⁽³⁶⁾

第 2 節

【テキスト】

nadaṇḍaṃ naśikhaṃ nayajñopavītaṃ nācchādanaṃ carati paramahaṃsaḥ/ na śītaṃ
na coṣṇaṃ na sukhaṃ na duḥkhaṃ na mānāpamānaṃ ca/ ṣaḍūrmivarjam/ nindāgarva-
matsaradambhadarpechhādveśasukhaduḥkhakāmakrodhalobhamohaharṣāsūyāhaṃkāra-
dīṃś ca hitvā svavapuḥ kuṇapam iva dṛśyate, etad vapur apadhvastaṃ saṃśaya-
viparītamithyājñānānāṃ yo hetus tena nityanivṛttas tannityapūtasthas tasya svayam eva
sthitir/

【和訳】

パラマハンサは、杖も持たず、髻を結うこともなく、祭儀紐も身に着けず、
衣も纏うことなしに遍歴⁽³⁷⁾します。彼は、寒さや暑さを気につけず、楽や苦も、
尊敬や軽蔑も気につけません。彼は6つの波を離れています。⁽³⁸⁾

彼は、誹謗、高慢、嫉妬、虚偽、傲慢、欲望、憎悪、楽、苦、愛欲⁽³⁹⁾、怒り、
貪欲、迷妄、興奮、不満、我執などを放棄⁽⁴⁰⁾し、自分の身体を死体のように見な
します。

彼はこの身体を嫌悪⁽⁴¹⁾しており、疑惑、錯誤、誤った認識の原因を常に欠いて
おり⁽⁴²⁾、かの永遠に清浄なものに住⁽⁴³⁾しています。彼はそれ自体で存立⁽⁴⁴⁾しているの
です。

【テキスト】

iti tañ śāntam acalam advayānandavijñānaghana evāsmi, tad eva mama paramadhāma
tad eva śikhā ca tad evopavītaṃ ca, paramātmātmanor ekatvajñānena tayor bheda eka
eva vibhagnaḥ sā saṃdhyā//2//

【和訳】

以上のような、寂静であり、不動であり、不二の歓喜そのものの認識の塊こ

そが私なのです。それこそが私の最高の住処⁽⁴⁵⁾であり、それこそが齧であり、それこそが祭儀紐なのです。

最高のアートマンと〔個別の〕アートマンの同一性を認識することにより、両者（＝最高のアートマンと個別のアートマン）の相違は粉碎されて、ただ一つのものとなります。それ（＝最高のアートマンと個別のアートマンの同一性を認識すること）が、〔真の〕サンディヤー⁽⁴⁶⁾なのです。

第3節

【テキスト】

sarvān kāmān parityajya advaite paramasthitih/
jñānadaṇḍo dhṛto yena ekadaṇḍī sa ucyate//
kāṣṭhadaṇḍo dhṛto yena sarvāśī jñānavarjitah/
sa yāti narakān ghorān mahārauravam eva ca//

idam antaraṃ jñātvā sa paramahaṃsah//3//

⁽⁴⁷⁾あらゆる欲望を放棄して、不二なるものに最高のあり方で住し、⁽⁴⁸⁾認識という杖⁽⁴⁹⁾を携えた者は、「一本の杖を携えた者」と呼ばれます。⁽⁵⁰⁾

木製の杖⁽⁵¹⁾を携え、あらゆる物を食べ⁽⁵²⁾、認識を欠いている者は、大恐怖地獄⁽⁵³⁾や〔その他の〕恐ろしい地獄へ赴きます。

以上のような違いを認識すれば、その者はパラマハンサ⁽⁵⁴⁾となります。⁽⁵⁵⁾

第4節

【テキスト】

āsāmbaro nanamaskāro nasvadhākāro nastutir navaṣaṭkāro bhaved bhikṣuḥ/
nāvāhanaṃ na visarjanaṃ na mantraṃ na dhyānaṃ nopāśanaṃ ca/ na lakṣyaṃ
nālakṣyaṃ na pṛthañ nāpṛthañ nāhar na naktam na sarvaṃ ca/ aniketasthitih/ evaṃ sa

bhikṣur hāṭakādīnām naiva pari grahen nāvalokanam ca/

【和訳】

乞食者は、空間を衣とし、敬礼することなく、「スヴァデー」と唱えることもなく、賞賛することもなく、「ヴァシャット」と唱えることもありません⁽⁵⁶⁾。勸請も退散もなく⁽⁵⁷⁾、マントラも⁽⁵⁸⁾、瞑想も⁽⁵⁹⁾、崇拜もありません。目に見えるものも見えないものもなく⁽⁶⁰⁾、異なるものも異なるものもなく⁽⁶¹⁾、昼も夜もなく、一切がありません。彼は家に住むこともありません⁽⁶²⁾。

このように、その乞食者は、黄金などを手に取ることもなく、眺めることもありません。

【テキスト】

athāvalokanamātreṇa na bādhaka iti ced bādhako 'sty eva/ yasmād bhikṣur hiranyaṃ rasena dṛṣṭam sa brahmahā bhavet/ yasmād bhikṣur hiranyaṃ rasena sprṣṭam sa paulkaso bhavet/ yasmād bhikṣur hiranyaṃ rasena grāhyaṃ sa ātmahā bhavet/ yasmād bhikṣur hiranyaṃ rasena nadṛṣṭam ca nasprṣṭam ca nagrāhyaṃ ca sarvān kāmān manogatān vyāvartayet/

【和訳】

「眺めるだけでは妨げにならない」と言うならば、[次のように答えましょう。] 妨げになります。

なぜならば⁽⁶³⁾、乞食者が欲望を持って黄金を眺めたならば、その者はバラモン殺しとなるからです。乞食者が欲望を持って黄金に触れたならば、その者はパウルカサとなるからです⁽⁶⁴⁾。乞食者が欲望を持って黄金を受け取ったならば、その者はアートマンを殺す者となるからです⁽⁶⁵⁾。

乞食者は、欲望を持って黄金を眺めたり、触れたり、受け取ったりしないことで、心の中のあらゆる欲望を退けることができます。

【テキスト】

duḥkhe nodvegaḥ sukhe nasprhaḥ tyāgī rāge sarvatra śubhāśubhayor anabhisneho na dveṣṭi na modaṃ ca/ sarveṣām indriyāṇām gatir uparamate/ jñāne sthiraṣṭhaḥ sadātmā ātmany evāvatiṣṭhate/ sa yatih kathyate sa eva yogī sa eva jñānī ca/ yat pūrṇānandaikabodhas tad brahmāham iti kṛtakṛtyo bhavati//4//

【和訳】

彼は、苦しみが生じて⁽⁶⁷⁾も戦慄せず、幸福も希求せず、激情を放棄し、⁽⁶⁸⁾あらゆる場合に好ましいものと好ましくないもの⁽⁶⁹⁾に愛着することなく、憎しみを抱くこともなく、喜ぶこともありません。あらゆる感覚器官⁽⁷⁰⁾の働きが停止しています。認識に確固として住しており、アートマンは常にアートマンにおいてのみ留まっています。

そのような者が自制者と呼ばれ、その者こそがヨーガ行者であり、知者なのです。彼は完全な歓喜そのものである認識となり、「私はかのブラフマンである」と知って、なすべきことをなした者⁽⁷¹⁾となります⁽⁷²⁾。

paramahamsopaniṣat samāptā//

『パラマハンサ・ウパニシャット』 終わり

【略号表】

- JMV *Jīvanmuktiviveka*. Ed. Hari Nārāyaṇa Āpaṭe. Ānandāśramasamskṛtagranthāvalī no.20. Puṇyapattana(Pune): Ānandāśramamudraṇālaya, 1916.
- ND *Nārāyaṇa's Dīpikā. Upaniṣadāṃ Samuccayaḥ*. Ed. Hari Nārāyaṇa Āpaṭe. Ānandāśramasamskṛtagranthāvalī no.29. Puṇyapattana(Pune): Ānandāśramamudraṇālaya, 1895.
- ŚD *Śāṅkarānanda's Dīpikā. Upaniṣadāṃ Samuccayaḥ*. Ed. Hari Nārāyaṇa Āpaṭe. Ānandāśramasamskṛtagranthāvalī no.29. Puṇyapattana(Pune): Ānandāśramamudraṇālaya, 1895.
- UV *Upaniṣadbrahmayogin's Vyākhyā. The Samnyasa Upanishads with the Commentary of Sri Upanishad-Brahma-Yogin*. Ed. T. R. Chintamani Dikshit. Madras: The Adyar Library, 1929.

【参考文献】

Degraces-Fahd, Alyette

1989 *Upaniṣad du Renoncement (saṃnyāsa-upaniṣad)*. L'espace Intérieur 36. Paris: Fayard.

Deussen, Paul

1905 *Sechzig Upanishad's des Veda aus dem Sanskrit Übersetzt und mit Einleitungen und Anmerkungen versehen*. Leipzig: Brockhaus.

Gambhirananda

1956 *Minor Upanishads*. Calcutta: Advaita Ashrama.

Olivelle, Patrick

1992 *Samnyāsa Upaniṣads: Hindu Scriptures on Asceticism and Renunciation*. New York & Oxford: Oxford University Press.

Ramanathan, A. A

1978 *The Saṃnyāsa Upaniṣad-s (on Renunciation)*. The Adyar Library Series Vol. 104. Madras: The Adyar Library and Research Centre.

Schrader, F. Otto

1912 *The Minor Upaniṣads Vol.1: Saṃnyāsa-Upaniṣads*. Madras: The Adyar Library.

Sprockhoff, Joachim Friedrich

1976 *Saṃnyāsa. Quellenstudien zur Askese im Hinduismus I. Untersuchungen über die Saṃnyāsa-Upaniṣads*. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 1. Wiesbaden: Kommissionsverlag Franz Steiner GMBH.

正信公章

1993 「インド中世における三杖一杖論争(1)その前史」, 『文明研究』第11号, pp.1-16.

福島直四郎

1923 「バラマハンサ・ウパニシャット」, 『ウパニシャット全書(第7巻)』(高楠順次郎監修), pp. 211-214, 世界文庫刊行会.

渡瀬信之

2013 『マヌ法典』(東洋文庫 842), 平凡社.

(本研究は JSPS 科研費 19K12953 の助成を受けたものです)

- (1) ここでの説明は、主として Olivelle 1992 にもとづくものである。 *Paramahaṃsa-upaniṣat* に関するより詳しい情報に関しては、Sprockhoff 1976, pp. 81-94 を参照。
- (2) *tīśakenakathaprasnamuṇḍamāṇḍūkyatittirih/ aitareyaṃ ca chāndogyam bṛhadāraṇyakam tathā// brahmakaivalyajābālaśvetāśvo haṃsa āruṇih/ garbho nārāyaṇo haṃso bindur nādaśiraḥ śikhā// Mukti-kā-upaniṣat* 30-31. (*One Hundred & Eight Upanishads*. Ed. Wasudev Laxman Shastri Pansikar. Bombay: Proprietor of Nirṇaya-Sagar Press, 1913)
- (3) Schrader は、前者は紀元前数世紀の間に、後者の多くは中世に著されたと考える。一方、*Āsrama-upaniṣat* はどちらにも含めがたく、両グループのちょうど境界線に位置し、300 年頃とする。他のウパニシャットにおける *Paramahaṃsa-upaniṣat* のパラレルや、他の文献における引用に関しては、Sprockhoff 1976, pp. 324-326 の表 5 を参照。また、Sprockhoff 1976, p. 280 の図は、*Paramahaṃsa-upaniṣat* と他の様々な文献の間の影響関係を分かりやすく示している。
- (4) *kuṭīcako bahūdakaś cāpi haṃsaḥ paramahaṃsa iti vṛtyā ca bhinnāḥ/ Śātyāyanīya-upaniṣat* p. 324.
- (5) *atha bhikṣūṇāṃ mokṣārthināṃ kuṭīcakabahūdakahamsaparamahaṃsās ceti catvārah/ Bhikṣuka-upaniṣat* p. 233; *parivrājakā api caturvidhā bhavanti kuṭīcarā bahūdakā haṃsāḥ paramahaṃsās ceti/ Āsrama-upaniṣat* p. 100; *atha khalu saumya kuṭīcako bahūdako haṃsaḥ paramahaṃsa ity ete parivrājakāś caturvidhā bhavanti/ Śātyāyanīya-upaniṣat* p. 324.
- (6) *saṃnyāsaḥ ṣaḍvidho bhavati kuṭīcako bahūdako haṃsaḥ paramahaṃsas turīyātīto 'vadhūtaś ceti/ Nārada-parivṛājaka-upaniṣat* p. 174; *saṃnyāsaḥ ṣaḍvidho bhavati kuṭīcakabahūdakahamsaparamahaṃsaturīyātītāvadhūta itī/ Bṛhatsaṃnyāsa-upaniṣat* p. 254.
- (7) パラマハンサと呼ばれる修行者の具体例としては、しばしば、サンヴァルタカ、アールニ、シュヴェータケートウをはじめとする複数の人物の名前が挙げられる。*tatra paramahaṃsā nāma saṃvartakāruṇīśvetaketudurvāsaṛbhunīdāghajaḍabharatadattātreya-raivatakaprabhṛtayo 'vyaktaliṅgā avyaktācārā anumattā unmattavad ācarantaḥ/ Jābāla-upaniṣat* p. 69; *atha paramahaṃsā nāma saṃvartakāruṇīśvetaketujaḍabharatadattātreyaśukavāmadevahārītakaprabhṛtayo 'ṣtau grāmāṃś caranto yogamārge mokṣam eva prārthayante/ Bhikṣuka-upaniṣat* p. 235.
- (8) ナーラーヤナ注の結びの詩節には、次のように記されている。*nārāyaṇena racitā jīvanmuktivivekataḥ/ śrutyartham āpya paramahaṃsopaniṣaddīpikā//*
- (9) Nārāyaṇa と Śaṅkarānanda が注釈を施したテキストでは、この後、第 1 節の前に *śāntipāṭha* などと呼ばれる次のような文がある。*om bhadraṃ karṇebhiḥ śṛṇuyāma devāḥ/ svasti no bṛhaspatir dadhātu/ om śāntiḥ śāntiḥ śāntiḥ/ hariḥ om/ 「オーム、神々よ、私たちは耳で吉祥なものを聞きます。ブリハスパティが私たちに幸福を授けてくれますように。オーム、寂靜あれ、寂靜あれ、寂靜あれ。ハリ、オーム。」*
- (10) ブラフマンの息子の神仙。ND: *nārado brahmaputro devarṣiḥ; ŚD: nārado brahmaṇo mānaśaḥ putraḥ; UV: devarṣir iti vikhyāto nārado munih/*
- (11) JMV, ŚD はブラフマン（ヒラニヤガルバ）、ND はサナトクマールを指すと解し、UV はヴィシヌ（ハリ）を指すと解する。JMV: *bhagavāṃś caturmukho brahmā;*

- ŚD: upagatya brahmaloke 'parājitāyām puri hiranyamayasaabhāyām sampatsamrddhāyām āsīnam caturānaṃ samastajīvaghanam hiranyagarbham; ND: bhagavantaṃ sanatkuṃmāram; UV: bhagavān hariḥ/ Ramanathan 1978, Degrares-Fahd 1989 はヴィシユヌ, Gambhirananda 1956 はブラフマンを指すと解する。
- (12) JMV は、服装や言葉などという日常の営みと解する。JMV: veśabhāṣādīrūpo vyavahāro hi mārgaḥ/
- (13) JMV は、心の平穩という内的な属性と解し、ŚD は、なすべきこと (karaṇīya) と言い換える。JMV: cittopamarūpo āntaro dharmāḥ sthitiḥ; ŚD: sthitiḥ karaṇīyam iti yāvāt/ Gambhirananda 1956 が duty (義務) と訳すのも、ŚD の解釈に従ったものであろう。Degrares-Fahd 1989 は discipline (規律) と訳す。
- (14) ŚD は、第 2 解釈として「人々」という意味を挙げる。ŚD: loke maharokādībhuvane jane vā/
- (15) Gambhirananda 1956 は、道ではなく、その主導者、唱道者 (exponent) が多くないというように解する。
- (16) ND の解釈に従って補った。ND: yady ekaḥ kaścid bhavati puruṣadhaureyaḥ/
- (17) JMV, ND は、nityapūta を最高のアートマン (paramātman) と言い換える。ND はさらに詳しく、そこに住する (atra tiṣṭhati) のが nityapūtaṣṭha であると付け加える。JMV: nityapūtaḥ paramātmā; ND: sa eva nityapūtaṣṭha/ nityapūtaḥ paramātmā atra tiṣṭhati nityapūtaṣṭha/ ŚD, UV もほぼ同様に解する。ŚD: nityapūtaṣṭho nityaṃ sarvadā kālatraye 'py aśeṣaviśeṣāśūnyatvena pūtaṃ pavitraṃ śikhāyajnopavītaḥ vedādhyayanādityāgaśuddhikāraṇaṃ satyajñānam anantaṃ ānandātmasvarūpaṃ yad brahma tasmīn idam aham asmīty aikyēnāvatiṣṭhata iti nityapūtaṣṭha; UV: nityapūte viśuddhātmani sve mahimni tiṣṭhātīti nityapūtaṣṭha/ 福島 1923 は、「清浄に常住する者なり」というように、nitya を pūta ではなく、stha にかかる副詞と解する。
- (18) JMV, ND は、ヴェーダで説かれる人 (ブルシャ) と解し、ND はさらにそれをブラフマンと言い換える。JMV: vedapratipādyāḥ puruṣo vedapurūṣaḥ; ND: sa eva vedapurūṣo vedapratipādyāḥ puruṣo brahmeti/ UV も同様に解する。UV: vedārthaḥ paramātmēti/ 先行研究の中では Ramanathan 1978 がこれに従う。一方、ŚD は、補助学やその他の学問分野とともにヴェーダを学んだ者と解する。ŚD: rgādīn vedān sāngān anyavidyāsthānāiḥ sahitān pāṭhato 'rthataś ca yo 'vagacchati sa vedapurūṣaḥ/ 福島 1923 は、「吠陀《智》の化身」と訳す。Gambhirananda 1956 は、「ヴェーダで説かれるブラフマン (Brahman inculcated in the Vedas)」と解し、JMV, ND 等に従っているものと思われる。Degrares-Fahd 1989 は、ヴェーダの理想を実現した人、あるいは、擬人化されたヴェーダと解する。Olivelle 1992 は、意味が明確でないとしながらも、ヴェーダの知識を真に習得した者、あるいは、ヴェーダに述べられた理想的な人を代表するようなものと考え。
- (19) JMV, ND は、ここからの部分で、冒頭の「彼らの行状はどのようなものですか」という質問に対する答えが暗示されていると解する。JMV: nityapūtaṣṭhatvaṃ vedapurūṣatvaṃ ca mukhato viśadayann arthāt kā sthitiḥ iti prāśnasyottaraṃ sūtrayati; ND:

nityapūsthatvaṃ vedapurusaṭvaṃ ca mukhato viśabdayann arthāt kā sthītir iti
praśnasyottaraṃ sūcayati — mahāpuruṣa iti/

- (20) ŚD は、時間を本性とし、完全に満たされた人（プルシャ）と説明する。ŚD: mahāpuruṣaḥ, mahān kālatrayaśūnyatvena kālātmā sa cāsau puri śayāno 'pi pariṣpūrṇaḥ puruṣo mahāpuruṣaḥ/ この mahāpuruṣo という語を、iti viduṣo manyante の iti の内容に含めるか否かで解釈が分かれる。注釈はいずれも含めず、先行研究では、Deussen 1905, 福島 1923, Degraes-Fahd 1989 は含めており、Gambhirananda 1956, Ramanathan 1978, Olivelle 1992 は含めていない。
- (21) yaccittam の yac を JMV, ND は yasmād の意味に解し、偉大な人物（mahāpuruṣa）である理由を述べるとする。それに従えば、「心が常に私だけに留まっているがゆえに、彼は偉大な人物なのです」となる。JMV: yasmād yogī cittam mayy eva sthāpayati tasmād aham api paramātmavarūpatvena tasmīn eva yogini āvirbhūto 'vasthito 'smi; ND: yasmād yogī mayy eva cittam sthāpayati tasmād aham cāham api paramātmā svarūpatvena tasmīn eva yoniprādurbhūto 'vasthīyate 'vatiṣṭhate/ UV は yac を yasya の意味に解し、mahāpuruṣa を指すとする。UV: yasya mahāpuruṣasya cittam mayy eva nārāyaṇe tadākārā-kāritayāvatiṣṭhate/
- (22) ŚD は内官（antaḥkaraṇa）と解する。ŚD: cittam antaḥkaraṇam śubhāśubhavāsanāsitam/
- (23) mayy evāvatiṣṭhate に合わせて解釈した。ただし、tasmin という指示代名詞が直前の citta を指示すると解釈するならば、「私も〔彼の〕心の中にだけ留まっているのです」となる。
- (24) JMV, ND は、ここから、冒頭で問われた道（mārga）を説いていると解する。JMV: idānīm ko 'yaṃ mārga iti prṣṭam mārgam upadiśati; ND: idānīm prṣṭam mārgam upadiśati — asāv iti/ 一方、ŚD は、ここまでで道の説明が終わり、ここから行状（sthīti）についての説明が始まると解する。ŚD: ko 'yaṃ mārga ity asyottaram uktvā kā sthītir ity asyottaram āha — asāv uktaḥ paramahaṃsah/ Cf. svaputrān bhrātṛn bandhvādīn chikhāṃ yajñopavītaṃ yāgam sūtraṃ svādhyāyaṃ ca bhūrlokaṃ bhuvarkokaṃ svarlokaṃ maharlokaṃ janalokaṃ tapolokaṃ satyalokaṃ atalapatālavitalasutalarasātālatalālamahātalaṃ brahmāṇḍam ca vivarjayet/ daṇḍam āchādanam ca parigrahet/ śeṣam visrjet/ iti//1// *Āruṇi-upaniṣat* pp. 3–5.
- (25) JMV, ND は「など（ādi）」という語によって、召使、家畜、家、土地などといった、世俗の様々な所有物が含まれると解し、ŚD もほぼ同様の説明をする。JMV: bandhvādīnīyādīśabdena bhrtyapaśugrhaḥkṣetrādīlaukikapariagrahādīviśeṣāḥ saṃgrhyante; ND: bandhvādīnīyādīśabdena bhrtyapaśugrhaḥkṣetrādīlaukikapariagrahādīviśeṣāḥ saṃgrhyante; ŚD: ādīśabdena svakṛtakṣetragrāhādayaḥ/ 他にも、Gambhirananda 1956, p. 3, n. 9 等を参照。
- (26) JMV, ND は sarva という語により、世間的な行為も含むと解する。JMV, ND: sarvakarmāṇī sarvaśabdena laukikavaidikanityanaimittikanīśiddhakāmyāni saṃgrhyante/ また、Gambhirananda 1956, p. 4, n.13 を参照。Ramanathan 1978 も同様の解釈をとる。UV はヴェーダに規定された行為を指すと解し、ŚD もほぼ同様に解している。UV:

- svādhītasvādhyāyavedajātam ca tadvihitasarvakarmāni; ŚD: sarvakarmāni nikhilakarmāni samdhyāvandanāgnihotrādīn/ Degraçes-Fahd 1989 も祭式 (les actes rituels) に限定する。
- (27) プラフマンの卵 (brahmāṇḍa). ŚD: brahmāṇḍam ca bhūmyādisaptāvaraṇaveṣṭitam nārikelaphalābham bhūgolakam/
- (28) JMV, ND は、腰布を用いて恥じらいを取り除くことと解する。JMV, ND: svaśārīropabhogo nāma kaupīnena lajjāvyāvṛtīh/ ŚD は、腰布に限定することなく、教えを聞く資格を持つ者が、寒さ、風、熱、棘が刺さることなどを除くことによって、自分に (sva) 奉仕 (upabhoga = sevana) できるようにすることと解する。ŚD: svaśārīropabhogārthāya ca/ svasya paramahamsatvamāninaḥ śārīram nānāvāṇo 'vayavo bhūtāvāsas tasyopabhogaḥ śravaṇaviḡṇnakārī lokalajjāśītavātāpakaṇṭakavedhādīparihāraḥkāraṇena sevanaṃ upabhogas tadarthaṃ tatprayojanam svaśārīropabhogārthaṃ svaśārīropabhogaprayojanāya/ 福島 1923 は「自己の法悦」と訳す。他にも Gambhirananda 1956, p. 4, n. 16; Olivelle 1992, p. 137, n. 2 等を参照。
- (29) JMV, ND では、世の人々が、杖などの徴表によって至上の住期にあることを知って、その者に相応しい食事を提供するなどの行為によって功德を積むことができるからであるとされる。ŚD もほぼ同様に解する。JMV, ND: lokasyopakāro nāma daṇḍādiliṅgenaitadyam uttamam āśramaṃ (JMV は、uttamāśramaṃ と読む) pariññāya taducitabhikṣāpradānādīpravṛtīyā sukṛtasiddhiḥ; ŚD: lokasya svadharmaniṣṭhatraivaṇṭikajānasya bhikṣādīdātūr upakārārthāya copakāro bhikṣādīdānenādrṣṭotpādanam śravaṇādīnāñānāharaṇam ca sa evārthaḥ prayojanam tatprayojanāyopakārārthāya/ この点については、Gambhirananda 1956, p. 4, n. 18; Olivelle 1992, p. 137, n. 2 等も参照。UV は、世間的な道から外れないようにするためとのみ述べる。UV: lokasyaivopakārārthāya ca lokonmārganirāsanāya/
- (30) ŚD は語源について述べた後、世間の人々に羞恥を引き起こすのを防ぐものであると説明する。ŚD: kaupīnam kutsitam lokalajjākaram meḍhrādīkam pīnam pīvaramāmsam kaupīnam tadācchādakam kaupīnam lokalajjākaranivārakam vastram ity arthaḥ/
- (31) JMV, ND は、牛や蛇などによる危害を回避するために用いると解する。JMV, ND: daṇḍena gosarpādyupadravaparihārah/ ŚD も同様に解するが、杖が竹製であることを付け加える。ŚD: daṇḍam gosarpāder daśanena damanahetubhūtam ekam vaiṇavam/ Ramanathan 1978 は “bamboo staff” と訳し、竹製であることを明示する。
- (32) JMV, ND は、寒さなどを回避するために用いると解する。JMV, ND: ācchādanena śītādīparihārah/ UV は寒さに加えて、蚊 (もしくは、虻) を挙げる。UV: svaśārīropabhogārthāya bhogārthaṃ śītamaśakādīnivṛtīyartham/
- (33) JMV, ND, ŚD は、ācchādanam ca の ca という語によって、靴などが含意されていると解し、JMV, ND は根拠となる伝承聖典を引用している。JMV: ācchādanam ceti cakāreṇa pādūkādīni samuccinoti/ tathā ca smṛtīh — kaupīnayugalaṃ vāsaḥ kanthāṃ śītanivāriṇīm/ pādūke cāpi grhṇīyāt kuryān nānyasya samgraham// iti; ND: cakāreṇa pādūkādīparigrahaḥ samuccitaḥ/ yat smṛtīh — “kaupīnayugalaṃ vāsaḥ kanthāṃ śītanivāriṇīm/ pādūke cāpi grhṇīyāt kuryān nānyasya samgraham” iti; ŚD: caśabdāt pādūke

api keśakīṭāsthyādidūṣitabhūmyasparśartham/ 他にも、 Gambhirananda 1956, p. 4, n. 17 等を参照。

- (34) JMV, ND, UV 等の解釈に従った。JMV: yat kaupīnādiparigrahaṇam asti tad asya yoginaḥ paramahaṃsasya mukhyaḥ kalpo na bhavati/ kim tv anukalpa eva; ND: yat kaupīnādiparigrahaṇam asti tad asya yogino mukhyakalpo na bhavati kim tv anukalpa eva; UV: kaupīnādiparigraho na hi paramahaṃsānām mukhyo 'sti/ Deussen 1905 は “dieser” と訳し、人、もの、ことのいずれにも解することができるが、文脈的には人を指しているように思われる。福島 1923 は「かゝる人」と訳し、Degrares-Fahd 1989 は「しるし (signes)」と訳す。
- (35) Deussen 1905 は “wer” と訳しており、人と解している。Olivelle 1992 は直前の文の tat は “that” と訳すが、この文の ko については、“Who is the highest?” というように人として解する。
- (36) Olivelle 1992 が指摘するように、このテキストでは、パラマハンサというヨーガ行者に 2 つのレベルを想定しており、第 1 節で述べられたような衣を身につけ、杖を携えた者が低次の者、第 2 節以下で述べられるような者が高次の者と考えられている。
- (37) これら 4 つは、家住期に相応しい物とされる。UV: na hi gārhasthyocitandaṅśikhāyajñopavītācchādanaṃ parigrhya paramahaṃsaḥ carati/ ND は carati を受け取る (ādatte) の意味に解する。ND: carati gacchati/ ādatta ity arthaḥ/ それに従うならば、「パラマハンサは、杖も鬻も、祭儀紐、衣も受け取りません」となる。
- (38) 飢え、渇き、悲しみ、迷妄、老い、死の 6 つを指す。JMV: ṣaḍ ūrmayaḥ — kṣūtipipāse śokamohau jarāmarāṇe ca; ND: ṣaḍ ūrmayaḥ — “kṣūtipipāse śokamohau jarā maraṇam eva ca”; ŚD: ṣaḍūrmivarjaṃ ṣaṣṣamkhyākā ūrmayaḥ saṃsārasamudrasya kallolāḥ prāṇa-buddhīsarāradharmā aśanāyāpipāsāśokamohajarādayas tadvarjam; UV: aśanāyāpipāsāśokamohajarāmarāṇānti ṣaḍūrmayaḥ tadrāhitaḥ/ 他にも、福島 1923, p. 214, 注 2; Gambhirananda 1956, p. 6, n. 3; Degrares-Fahd 1989, p. 212, n. 8; Olivelle 1992, p. 138, n. 4 等を参照。
- (39) JMV, ND, ŚD は女性などに対する性的な熱望と解し、UV は望みの物に対する熱望と解する。JMV, ND: yoṣidādyabhilāṣaḥ kāmaḥ; ŚD: kāmo maitunābhilāṣaḥ; UV: iṣṭavastvabhilāṣaḥ kāmaḥ/
- (40) JMV, ND は、「など (ādi)」という語によって、享受の対象となる物に対する「私の物」という思いの正当化などといった認識が含まれると解し、UV も同様に解する。JMV: ādisābdena bhogyavastuṣu mamakārasamīcīnatvādayo buddhayo grhyante; ND: ādisābdena bhogyavastuṣu mamakārasamīcīnatvādidubbuddhayo grhyante; UV: ādisābdena svīyeṣu mamakārādhīḥ grhyate/ 他にも、Gambhirananda 1956, p. 6, n. 7 等を参照。
- (41) JMV, ND, ŚD は、yatas tad vapur apadhvastam という読みを採っており、この場合は「自分の身体を死体のように見なします。なぜならば、彼はこの身体を嫌悪しているからです」というように、自分の身体を死体のように見なす理由となる。
- (42) ND, ŚD の解釈に従った。ND: tena nityaṃ nivṛtto hīno rahita iti yāvat; ŚD: nityanivṛtto nityaṃ sarvadā saṃvartakādir nivṛtīm parāṃ gataḥ parityaktāvīdyāsaṃbandha

ity arthah/

- (43) ND の読みは tannityabodhas であるが、異読として、底本と同じ tannityapūsthas という読みを提示し、「永遠で清浄なもの、すなわち、最高のアートマンに住している」と解する。ND: tannityapūsthas itī keṣāmcit pāthah/ tatra tasmin nityapūte paramātmāni sthita ity arthah/
- (44) この部分を、Olivelle 1992 は「それ自身が彼の行状です (That itself is his state)」と訳し、冒頭の「彼らの行状はどのようなものですか」という2つ目の問いに対する答えと解する。ただし、avasthitiḥ という読みを採用している注釈者もあり、テキストの他の箇所には ava√sthā- という動詞もしばしば見られることなどを考慮するならば、この説は必ずしも受け入れられるものではない。
- (45) ŚD: paramadhāma paramaṃ ca tad bhāsuram dhāma sthānam ca paramadhāma/ 一方、JMV, ND は、実在の本質 (実在それ自体, vāstavaṃ svarūpaṃ) と解する。JMV, ND: paramaṃ dhāma vāstavaṃ svarūpaṃ/ 本質 (real nature) と解する Gambhirananda 1956 も、JMV, ND の解釈に従っていると考えられる。
- (46) 『マヌ法典』2.101 以下などでも規定されるように、ヒンドゥー教の一般的なサンディヤー (sandhyā) は、夜と昼の結合時 (sandhi) である日の出、昼と夜の結合時である日没 (時に、朝と昼の結合時である正午も) に行う礼拝を指すが、ここでは最高のアートマンと個別のアートマンの同一性の認識をそれに置き換えている。JMV: yeyam ekatvabuddhiḥ seyam ubhayor ātmanoḥ saṃdhau jāyamānatvāt saṃdhyety ucyate; ND: yeyam ekatvabuddhiḥ saivobhayor ātmanoḥ saṃdhau jātatvāt saṃdhyā; ŚD: sā jīvāparamātmānor bhedaḥaṅgenāivānusāṃdhānalakṣaṇā/ saṃdhyā brahmacāryāder iva paramahaṃsasyāpi saṃdhau bhavā kriyaiva; UV: yā jīvābrahmaikyasthitiḥ saiva sandhyā/ UV は、サンディヤーのこのような解釈の根拠として、次のような伝承聖典の詩節を引用している。UV: nodakair jāyate sandhyā na mantroccāraṇena tu/ sandhau jīvātmanor aikyaṃ sā sandhyā sadbhīr ucyate// Cf. karmatyāgān na saṃnyāso na praiścōccāraṇena tu/ saṃdhau jīvātmanor aikyaṃ saṃnyāsaḥ parikīrtitaḥ//8// *Maitreya-upaniṣat* p. 116. 他にも、福島 1923, p. 214, 注 4; Gambhirananda 1956, p. 6, n.15; Degraes-Fahd 1989, p. 177, n.16; Olivelle 1992, p. 116, n.7 等を参照。
- (47) JMV, ND は、第1節の“svaputra”云々により冒頭の第1の問いに答え、“mahāpuruṣa”云々により第2の問いに簡略に答えて、“saṃśayaviparyaya”云々によってそれを詳述した後、この第3節でまとめていると解する。JMV: ko 'yaṃ mārḡa ity praśnasyāsau svaputretyādinottaram uktam/ kā sthitiḥ ity asya mahāpuruṣa ityādinā saṃkṣipiyottaram uktvā saṃśayaviparītyādinā tad eva prapañcyedānīm upasaṃharati; ND: ko 'yaṃ mārḡa ity asyāsau svaputretyādinottaram uktam/ kā sthitiḥ ity asya mahāpuruṣasya ityādinā saṃkṣipiyottaram uktvā saṃśayaviparyayetyādinā tad eva prapañcyedānīm upasaṃharati/
- (48) ŚD: paramasthitiḥ paramotkṛṣṭothhānāśūnyā sthitiḥ avasthitiḥ yasya sa paramasthitiḥ/
- (49) ŚD: jñānadaṇḍo jñānam ahaṃ brahmāsmīti bodhas tad eva bhedaajarāgadveṣagosarpādida-manahetur daṇḍo jñānadaṇḍah/
- (50) ND: tridaṇḍinām yathā vāgdaṇḍo manodaṇḍah kāyadaṇḍas ceti trividho daṇḍa evam

ekadaṇḍinām dvividho jñānadaṇḍaḥ kāṣṭhadaṇḍas ceti/ 三杖 (tridaṇḍa) と一杖 (ekadaṇḍa) については、他にも Olivelle 1992, p. 152, n. 30; 正信 1993 等を参照。

- (51) Deussen 1905 は “Hochstab” と訳すが、長さの単位としての kāṣṭha の意に解したものとと思われる。ŚD は竹製の杖と解する。ŚD: kāṣṭhadaṇḍaḥ, kāṣṭham daṇḍaḥ kāṣṭham veṇurūpaṃ daṇḍaḥ kāṣṭhadaṇḍaḥ/
- (52) 避けるべき物とそうでない物を考慮することなく、すべてを食べることと解する ND に従った。ND: sarvāśi varjyavarjyam akṛtvā sarvam aśnāti/ 福島 1923, Ramanathan 1978, Degraçes-Fahd 1989 も同様に解する。一方、Olivelle 1992, p. 139, n.6 では、あらゆる階級の者が提供する食事をとることと解しており、Deussen 1905 も同様の解釈と思われる。UV は、ただ腹を満たすためにとだけ述べており、上記の2つのいずれの立場であるか判断しがたい。UV: sarvāśi kevalodarambharī/ 一方、ŚD は必ずしも食べ物に限定しない解釈をとる。ŚD: sarvāśi sarvaṃ viṣayajātaṃ paramahaṃsāsāraṃiṇaḥ śāstre niṣiddham tasyāśanam upabhoga āśaḥ so 'syāstīti sarvāśi/ 「あらゆる種類の感覚の対象を享受し (takes to all sorts of sense-objects)」と解する Gambhirananda 1956 は、ŚD の解釈に従ったものと思われる。
- (53) この地獄は、例えば、『マヌ法典』4.87-90 で挙げられる 21 種類の地獄にも含まれる。当該箇所和訳は、渡瀬 2013, pp. 142-143 を参照。
- (54) JMV, ND は認識という杖と木製の杖との違いと解し、ŚD, UD はそれぞれの所有者の間にある違いと解する。JMV: evaṃ sati jñānadaṇḍakāṣṭhadaṇḍayor yat tāratamyam uttamādhmatvarūpaṃ tad idam avagatyottamaṃ jñānadaṇḍaṃ yo dhārayati sa eva mukhyaḥ paramahaṃsa ity avagantavyam; ND: idam jñānadaṇḍakāṣṭhadaṇḍayor antaram uttamādhmatvalakṣaṇam uktaṃ taj jñātvā; ŚD: antaraṃ jñānadaṇḍakāṣṭhadaṇḍadhārīnor bhedaḥ; UD: idam pāramārthikābhāsaṃnyāsinor antaram jñātvā/
- (55) Ramanathan 1978 は「以上のような違いを認識すれば、そのパラマハンサは空間を衣とし……」というように、第3節末尾と第4節冒頭を繋げて訳す。Degraçes-Fahd 1989 もこの一文を第4節の冒頭に含めている。
- (56) vaṣaṭ と svadhā は、いずれも聖火に供物を捧げる時に唱えるものであるが、vaṣaṭ は神々に供物を捧げる際に、svadhā は祖霊に供物を捧げる際に用いられる。ŚD: na svadhākāraḥ piṭṛṇ uddīśya svadhākāro 'pi/ これらを唱えないというのは、祭式行為を行わないことを間接的に示している。Degraçes-Fahd 1989, p. 213, n. 16; Olivelle 1993, p. 132, n.14; p. 139, n. 7 等を参照。
- (57) 祭式の初めに神々を呼び寄せることと、終わりに去らせることを指す。ŚD: nāvāhanam, āgaccha gopījanamanoramaṇaṃ kandarpakoṭīkam anīyamūrte nilotpādalalāśyā-maletyādibhāvanābhāvitamahāpīṭhādau svāmīṣṭadevatāyām ākāraṇam āvahanam tat paramahaṃsena nānuṣṭheyam/ na visarjanam, uktaviśeṣaṇasya devasya pīṭhādau sthitasya sūryādiṣu preraṇam visarjanam tad api na/ 他にも、Olivelle 1993, p. 139, n.8 等を参照。
- (58) この点については、Olivelle 1993, p. 116, n.6 等を参照。
- (59) JMV は、dhyāna を一度だけ念じること、upāsana を絶えず念じることと解する。JMV: sakṛt smaraṇam dhyānam, nairantaryeṇānusmaraṇam upāsanam iti tayor bhedaḥ/ 福

- 鳥 1923 は, *upāsana* を「奉仕」と訳す。
- (60) Ramanathan 1978 は, *lakṣya* を「目的 (aim)」と訳す。
- (61) Cf. *astamita āditye katham cāsyopasparśanam iti/ tām hovāca/ yathāhani tathā rātrau nāsyā naktam na vā divā/ tad apy etad ṛṣiṅoktam/ sakṛd divā haivāsmāi bhavati/ ya evam vidvān etenātmānam samdhatte samdhatte/ Kāṭhaśruti-upaniṣat* pp. 34-35. 他にも, Olivelle 1993, p. 131, n.10 等を参照。
- (62) ŚD は, 空き家や寺院などに留まることと解する。ŚD: *aniketasthitir eva niketo nīḍam āśrayo grham iti paryāyah/ svanirmitagrāvayatikṛtam sūnyāgāradēvayātanādikam sthitiḥ sthānam yasya so 'niketasthitiḥ/*
- (63) UV は, *yasmād* を「享受するために (*upabhoganimitāt*)」と解する。Deussen 1905 は, “Weil er ein Asket ist, darum, (彼は乞食者であるから……)” と訳し, 「比丘なるがゆえに」と訳す。福島 1923 も, それに従っているものと思われる。
- (64) ŚD は, 『マヌ法典』 11.55 で大罪の筆頭として挙げられる, いわゆるバラモン殺し (*brahmahatyā*) と解する。ŚD: *sa brahmahā bhavet/ svahastaghātītaśrotriya-brāhmaṇa-vadhadosabhāk syād iti/* 一方, JMV, ND は, 文字通り「ブラフマンを滅ぼす者」と解し, Degraes-Fahd 1989 もこれに従う。JMV: *tataḥ śāstrasiddham advīṭyaṃ brahma tena bhikṣuṇā hatam eva bhavati/ tasmād asau brahmahā bhavet; ND: brahmaheti/ brahmaiva satyam anyan mithyety anaṅgikārād brahma tena hatam iva bhavati tena brahmahā bhavet/ yat smṛtiḥ — “brahma nāstīti yo brūyād dveṣṭi brahmadevam ca yah/ abhūtabrahmavādī ca trayas te brahmaghātakāḥ” iti// yad vā brahmaghna iva tasya narako bhavati/* 他にも, Gambhirananda 1956, p. 10, n.14 等を参照。
- (65) JMV, ND, UV によれば, ニシャーダの男性とシュードラの女性との間に生まれた子どもで, 皮革を扱う仕事をし, 野蠻人 (*mleccha*) のような者ということになる。JMV: *paulkaso mlecchasadrśaḥ; ND: niṣādāc chūdrāyām jātaḥ pulkasaḥ prajñāditvāt paulkaso varṇavyatyayena vā paulkasaḥ tattulya iti yāvat; UV: paulkasaś carmakāraḥ/* 他にも ŚD の以下の記述を参照。ŚD: *paulkaso 'ntyajād utkrṣṭo 'nyasmād anulomajapratilomajān nikṛṣṭo 'ntyajaviśeṣo 'raṇyānīcaro māṃsaktāntyajajātiviśeṣaḥ/* 福島 1923, p. 214, 注 8 では, シュードラを父とし, クシャトリヤを母とする者とされる。
- (66) *ātmahan* という語は, 自殺, 自死も意味するが, JMV や ND, ŚD は文字通り「アートマンを殺す者」と解する。JMV: *abhilāṣapurāḥsaram hiraṇyaṃ na grāhyaṃ grhītam cet tadā sa bhikṣur dehendriyādisākṣiṇam asaṅgam cidātmānam hatavān bhavet; ND: asaṅgasyābhoktur ātmano hiraṇyasaṅgitvabhokṛtvāṅgikārāt; ŚD: ātmahā satyajñānānaṅdānantātmavarūpasya hantā/* 他にも, Gambhirananda 1956, p. 10, n.16 等を参照。
- (67) ND, ŚD, UV は, *duḥkhe* という処格を, 動詞 *ud√vij-* の対象ではなく, 絶対節として解する。ND: *duḥkhe sati udvegam na gataḥ; ŚD: duḥkhe nodvignaḥ, asya bhikṣoḥ pratikūlavedanīye sati na samtāpaḥ śūrasyeva samaramūrdhani prahāre; UV: duḥkhaprārabdhodaye 'pi nodvignaḥ/*
- (68) ND は *sarvatra śubhāsubhayor anabhisnehaḥ* をひとまとまりと見なし, それに続く *na dveṣṭi na modaṃ ca* をその結果と見なす。

- (69) UV は、śubha を行為の道 (pravṛttimārga), aśubha を止滅の道 (nivṛttimārga) と言
い換え、前者を dveṣṭi という動詞の対象、後者を modam (anubhavati) の対象と解
する。
- (70) ŚD, UV は、5つの感覚器官だけでなく、行為器官と内官も含める。ŚD: sarveṣāṃ
nikhilānām bāhyābhyantarakarmajñānaśaktīnām ekādaśasamkhyākānām cakṣurādīnām
manahparyantānām; UV: sarveṣāṃ jñānakarmendriyāṇām caśabdād antaḥkaraṇasya ca/
- (71) UV は、離身解脱した者と解する。UV: kṛtakṛtyo videhamukto bhavati/ Gambhirananda
1956 は、欲望のなくなった者 (he reaches the end of his desires)」と解する。
- (72) Nārāyaṇa と Śaṅkarānanda が注釈を施したテキストでは、第4節の後に次のよう
な文がある。om bhadram karṇebhiḥ śṛṇuyāma devā bhadram paśyemākṣabhir yajatrāḥ/
sthiraḥ aṅgais tuṣṭvāṃsas tanūbhir vyaśema devahitaṃ yad āyuh/ svasti na indro
vṛddhaśravāḥ svasti naḥ pūṣā viśvavedāḥ/ svasti nas tārkṣyo ariṣṭanemiḥ svasti no bṛhaspatir
dadhātu/ om śāntiḥ śāntiḥ śāntiḥ/ 「オーム、神々よ、私たちは耳で吉祥なことを聞き
ます。崇拜に値する者よ、私たちは目で吉祥なものを見ます。私たちは神々から授
かった寿命を堅固な手足と身体で称え、享受します。大いなる名声を有するイン
ドラが私たちに幸福をもたらしてくれますように。一切を知るプーシャンが私たちに
幸福をもたらしてくれますように。車輪の外縁を傷付けられることのないタールク
シヤが私たちに幸福をもたらしてくれますように。プリハスパティが私たちに幸
福をもたらしてくれますように。オーム、寂靜あれ、寂靜あれ、寂靜あれ。」